

這うことが歩く能力を育てる

『ドーマン博士の幼児開発法』に紹介されている話ですが、博士が終戦で復員し、脳障害児の治療に従事した初期のころです。貧しいために治療の受けられない脳障害児の方が、当時は最も有効だと信じられている治療を受けている脳障害児よりも、症状が良くなっていることが多いのに気がついた博士は、“良くなるには良くなる理由がなければならぬ”と考え、その原因を追及しました。その結果、現在の治療訓練の一つ、“這い這い運動”を発見したのです。

脳障害のため、歩くべき年齢を過ぎても歩けない子供がいたとします。歩く能力は、歩くことによって向上するものですから、当然、治療法として“歩く訓練”があります。しかし、脳障害児にとっては、正常児以上の苦痛が訓練に伴います。

だから、歩く訓練は長く続けることはできませんし、子供の方からは求めて歩くことはありません。従って歩く訓練はどうしても不足がちということになりますので、歩く能力がなかなか育たないのです。

ところが、貧しい家の脳障害児は、歩く訓練など全く受けなくて、

部屋の中に置きざりにされています。しかし、子供の目は開いていますので、目にした物に手を伸ばし、届かなければ、取ろうとして、そのきかない手足を努力して働かせます。

こうして子供は、部屋の中を意欲的に這い回りますが、この這い回るために手足を働かせることが、“歩く訓練”以上に治療的効果があることを、ドーマン博士は突きとめたのです。

一日にわずかばかり歩く訓練をしたところで、一日中這い回るこの効果には、とても及ばないのです。

それは、子供にとって義務的、受身的な手足の使い方と、自ら求めて意欲的、能動的にする手足の働かせ方との違いです。

このようにして、這うことの価値が、ドーマン博士によって発見されました。人間は、歩くことの前に這うことをしますが、それは歩く能力を作るための前段階の大切な訓練だったのです。そればかりか、這うためには、両手と両足と頭の、五つの部分が、一緒に連繫して働かなければならず、それには一定の型があることを発見しています。

つまり、幼児は這うことにより、両手、両足、頭を連繫的に働かせる

ことを学び、それは知的発達をもうながす効果があると言うのです。だから、這う過程を通らずにいきなり歩かせる“歩行器”なるものは勿論、這うことを制限している“サークル”などは、幼児にとって大層有害なものである、と指摘しています。

ドーマン博士の行なう有力な治療法として、両手・両足・頭に一人ずつついて、五人が連繋して行なう“這い這い型運動”があります。けれども、その仕方をここでは、文章ではうまく説明できませんし、この運動が正確にできなかつたら、かえって有害ですから、説明することを控えます。

その代わりに、私の所に、イギリスの国営放送局が制作した、この訓練を行なっている現場を撮影した映画フィルム(二巻)があります。必要の場合はそれを度々公開しておりますので、それを御覧下さい。また本文、“第3章 脳障害児の漢字による訓練法 1 バニーの記録”で、そのシナリオを紹介しました。参考になると思います。

また、藤沢市にある“脳研”では、ドーマン研究所で学んだ先生方が、この訓練法を実践して治療に当たっていますので、そこでよく学習し、身につけられることも良いと思います。それからまた、後述する

佐藤友泰氏の創英教育研究所でも、この方法を実践しています。近ければ、そこに通うことをお奨めしますが、遠ければ見学するか、できれば実習させてもらおうとよいと思います。